

文化は衝突しない。
自分と相手を認めることから、
共生への道が拓ける。

中国・唐代に始まり、宋代に盛んになり、日本にもたらされた茶文化。以来、日本と中国のそれぞれで発展し、起源を同じくしながらも、今では大きな違いを持つに至っている。この茶文化をモチーフに、日本と中国の文化を比較研究している彭先生は、「どちらが上も下もない。共通点と相違点をそのまま受け止め、それぞれを尊重することが大切」と語る。生活様式や価値観の異なる者同士が、信じ助け合っつてもともに生きる。そんな未来を願う先生に、お話を伺った。

中国・北京で育ちながら 日本に親しんだ幼少時代

彭先生は、中国・北京市の生まれ。ご両親とともに北京大学の教授で、日本文学など日本に関わる研究や教育に携わっていた。そんな環境で育った先生は、小さな頃から、日本の童謡を聴いたり、両親の日本人の恩師から可愛がられるなど、日本に親しむ機会が多かったそう。私自身も中国の大学や大学院で日本文学を学びました。中国社会科学学院大学院に在籍していた時、日本に留学す

る機会があつて広島大学大学院へ。その後、お茶の水女子大学の大学院にも進みました。

そこでは、当時発足したばかりの「比較文化学専攻」に所属。日本と中国の文学を比較する研究に取り組んだ。その際、周作人（しゅう・さくじん。作家、日本文化研究者）を取り上げたことが、先生の転機になった。「彼は日中戦争時に日本に協力したこともあつて、長い間著書が中国で出版されず、研究が難しい作家でした。けれど日本のことをとてもよく理解していて、その著作物を読み進めるうち、私は日本の文化に

も大きな関心を抱くようになったのです。

その後先生は、創設間もない本学の総合政策学部勤務することになった。「これまで以上に広い視野で日本と中国を比較してみたい」という思いから、比較文学から比較文化へと研究テーマを広げていった。

身近な「茶」を切り口に、 日本と中国の文化を見つめる

先生が日本と中国の文化を比較す

る際、モチーフとしているのが「茶文化」である。これを通じて、それぞれの思想や宗教観、美意識や文化の継承などについて考察していると先生は語る。

日本の茶文化と聞いて、多くの人がイメージするのは「茶道」ではないだろうか。これはもともと中国で生まれたもので、唐代の詩と書籍の中で初めてその言葉が使われたことが確認されているそう。それが中国の寺院から日本にもたらされ、平安時代の王朝・貴族が模倣した。その後、鎌倉時代を経て室町や安土桃山時代には、書院造の建物の広間で



中国から渡ってきた天目茶碗などの豪華な茶道具を用いて楽しむ「書院茶」が武士階級を中心に愛好されるようになった。その後和物も取り入れ草庵思想に基づいた「わび茶」が生まれ、千利休によって、わび・さ

びを求める禅の修行として「茶の湯」が結実する。そして表千家・裏千家といった家元制度が確立し、500年以上、日本の伝統文化として継承されてきた。

「しかし中国の場合、王朝が交代

するたびに以前の文化は途絶え、新たな文化が登場します。例えば、日本の茶道に欠かせない「抹茶」。これはお茶を粉末にした「末茶」として中国の宋代に流行し、楽しまれました。その後、日本に渡りました。現在の中国には残っていません。明の初代皇帝・朱元璋が、末茶の製造禁止令を出したことで姿を消したのです。その代わりに「葉茶」が主流になり、小さな急須と茶碗で楽しむ煎茶が盛んになりました」。日本と中国の社会構造の違いが文化伝承に与える影響をこんなところからもうかがうことができる、と先生は説明してくれました。

日本の茶道、中国の茶芸。 独自に進化した茶文化

先生は日中の茶文化の研究に着手して数年後、裏千家の松村宗喜先生に師事し、自身も茶道の稽古を受けるようになった。もちろん茶道の知



本学部の中国語の授業で使われているテキストは先生が手がけたもの。「マスターすると中国語検定試験3級にパスできますよ」

識はあったが、実際に稽古を受けて見方がまったく変わった、と先生は当時を振り返る。「日本の茶道はもとも禅宗とともに中国からやって来たもので、禅や人生の修行に通じています。修行の場であるお稽古で、松村先生からは最初に「ご自分をお棄てなさい」と指導されました。自分を棄てるというのは仏教の修行で言うところの「我、自分中心の考えから脱却するということです」。松村先生はことあるごとに「お茶は心ですよ」と言うそう。茶道の「心」とは「和敬静寂」といわれるもので、自然と人間との調和や、人を敬う心遣い、清らかさ、何があっても動揺しない心の持ち方を象徴

し、生き方の指針ともなります。お稽古を重ねることで、この「和敬静寂」を単なる知識ではなく、実践的



中国語のナレーションも行っている先生。さまざまな教材で、先生の中国語にふれることができる。



日本語で、そして中国語で。先生は日中それぞれの国の文化についての考察を、多くの書籍で発表している。

で楽しむ茶芸が、現代中国での茶文

化の二つになっている。お茶を点てる時はもちろん、お客としてお茶室に入る前からお茶をいただくまで、型と形を重んじる日本の茶道では所作（立ち居振る舞い）が厳しく定められている。一つひとつに心を込めることで精神性を高め、「道」を究めていく。稽古では和歌も詠むし、花や香にもふれる。茶道は、日本の思想や芸術を総合的に学ぶ場にもなっている。

一方、茶文化発祥の地である中国でも、茶は人間が生きる上で重要なものだ。中国人の人生観や生き方には、自由に生きて超越の境界を求め、老荘思想と、現世を重視する儒家思想とがともに影響を及ぼしている。家族や友人といった人間関係をとても大切にし、生まれてから死ぬまでの一度限りの人生を思う存分に楽しもうとする価値観がある。茶は人間関係を親しくするための媒体で、味や香り、色などを心通じ合う相手とともに楽しむ。和気藹藹とした雰囲気の中でパフォーマンスを皆

「自分の側が正しい、優れている」という価値観は争いにつながります。寛容な心で相手を受け止め、「共生」への道を模索していく。これは世界各地で紛争が起こっている21世紀において、私たちに求められる姿勢ではないでしょうか。

暮らしに身近な「茶」というモチーフ一つとっても、日本と中国には大きな違いがある。「日本の茶道はまさに「道」、修行の要素があり、中国では「芸」、楽しむものになっています。けれど、どちらが上でどちらが下という区別はありません」。比較文化において最も大切なのは相互理解。共通点と相違点を知り、それを認め合うこと、と先生は言う。

比較文化の研究を続けてきて思うのは、「文化は衝突しない」ことだと先生は語る。「茶文化も、中国と日本の僧侶たちが日本に持ち込んだもの

が受け入れられ、日本の人々に親しまれて独自の文化になりました。文化と文化の出会いには新たな文化を生み、異なる生活様式や価値観を持つ人々を平和的につなげます」。いま中国では、多くの人がマンガやファッションなど日本発の文化に親しんでいる。「日本をもっと知りたい」と来日し、学んでいる中国人留学生が本学にも600名ほど在籍しています。「日本の何が好き？」と彼らに訊ねると、「ライフスタイルのすべてが好き」と（笑）。文化の面では、日本と中国が親近感でつながっていることを感じます」。

その一方で、現在、日中関係は揺



先生が茶文化に関する文章を寄稿した雑誌「和華」。2013年、「日中友好」を理念に、中国人留学生がアルバイト代をもとに創刊したもの。



和やかに進められる先生のゼミ。「もっと中国のことを知りたい」「視野を広げたい」といった指向の学生が集まるとのこと。

れている。しかし、「若者の中には日
中双方の美点を認め、こんな時だか
らこそ自分たちの力で両国をつなご
う、と行動する人たちがいます。そ
の様子に勇気づけられることも多い
です」。例えば先生の教え子の一人
は、国内報道が中国の反日デモを取
り上げていた時期に、夏季休暇を利
用して上海に短期留学をした。帰国
後、「日本で見ていたニュースとは
違って、向こうの人はみんな親切。
自分の目で現地を見て、実情を知る
のは有意義な体験だった」と先生に
話してくれたそうだ。そしてその経
験から「生涯をかけて日中間の友好
関係をつくりたい」という志を育み、
在学中、長期留学をするためにもう

一度中国に渡った。

そうしたエピソードを話してくれ
る時、先生が浮かべた輝くような笑
顔は、柔軟な感性や豊かな行動力を
持つ若い人たちの存在に希望の光を
見出していることを物語っていた。

比較文化で育む広い心を 自分にも向けてほしい

先生は自身のゼミで、日本と中国
の文化を比較して理解を深め、また
比較の視点によって東アジアや世界
における日本の位置づけを見つめる
ことをテーマに、学生の指導にあ
たっている。「例えば1年次の基礎演
習では、中国人の価値観や社会、生
活などについてまとめられている
『中国文化読本』という本を皆で読
みます。3年次のゼミでは『日・韓・
中三国の比較文化論』を読みます。
(北京大学の教授が書いた本なので
難しく思えるかもしれませんが、章
の一つひとつはそれほど長くないの

で、あまり苦勞せずに読み進められ
ますよ。)一章を各自が通読した後、
発表担当の学生がプレゼンテーショ
ンを行い、みんなでディスカッショ
ンして理解を深めるスタイルを採っ
ているそうだ。

また先生は学生に向き合う中で、
「心の余裕を持つことの大切さ」を
伝えているという。「今の学生を見て
いて、気持ちのゆとりや自信がない
な、と感じます。できないことは誰
だってありますから、焦らずに敢え
てゆとりを持つことを心がけて、目
の前の課題にゆとり向き合いなさ
い、と話しています」。

日本の人は自分の内側に籠りがち
ではないだろうか、と先生。「悩んで
いても人に話さず、抱え込んで悶々
としていることが多いと思います。
ありのままの自分を周囲にさらけ出
すことを良しとしない。それは日本
的な美学の一つではありますが、行
き過ぎると自分を追い詰めることに
なりかねません。これが中国でした
ら、どんな問題や悩みごとも家族や
友人と話し合って解決しようとする

でしょう」。

学生には、中国を始めいろいろな
国の文化やその基盤となっている価
値観を知ってもらいたい、そこから
視野が広がる、と先生は語る。「比較
文化を通じて身につけた寛容の精神
を、自分にも向けてもらいたいです
ね。自分を認め相手を認めることか
ら、信じ合い、助け合ってもに生
きていくという「共生」への道が拓
けるのではないのでしょうか」。

高校生の皆さんへ

まず、自分自身を大切にすること
を心がけていただきたいです。自分
を尊重し、余裕と自信を持つて勉強
すれば、楽しく実りの多い学生生活
を送ることができるでしょう。また、
なるべくたくさん本を読んで、た
くさんの人と交流することもお勧め
したいですね。知識をつけるだけで
なく、自分の目で確かめ判断しよ
うとする姿勢が、借りものではない自
分ならではの価値観を磨くことにつ
ながると思います。